



大津島勤務のうちにやり遂げたいことのひとつ、縁とゆかりの話のつづきです。今から58年前になるでしょうか…いにしえの小学校関係者をつなぐ機会を得ました。ことの発端は、あれだけ続いたコロナ禍が小康している隙に、珍しく帰省する家族がいるので、にわか観光プランを立てたことです。

いざスケジュールをたてると、それなりに問題点に気づくことになりました。後期高齢者を案内するには車での移動が望ましく、そのためにフェリーの時間に縛られてしまうこと。また、観光は馬島地区が中心であり、ゆっくり待機できる場所などなければ、午後一便を逃すと夕方まで時間を持て余すことになり、昼までで引き上げるのが現実的なプランになることなどです。分刻みのスケジュールを意識しつつも、島勤務者が案内するので、おおむね予定通りに島内一周ができ、いよいよ約束のお宅訪問とあいなりました。

積もる昔話は、個人情報もあるのであつさり割愛しますが、その当時の教師と教え子、それに健在なるお母様を中心に、思い出話に花を咲かせました。大昔の島事情を知るものでなければ、聞いてもピンとこない浮世離れした話もありました。滞在は1時間半余り。話し始めたらきりが無いという気持ちと、胸がいっぱいで何から話せばいいのか…という雰囲気を感じつつも、フェリーの時間があるので、きりのいいところで退散。結果として、およそ四半世紀ぶりの家族旅行と、はるか半世紀をこえての家庭訪問ができました。関係者の皆様、ご調整ありがとうございました。

馬島地区 渡邊あゆ子様宅



左から

中村、あゆ子様、お母様、旧姓 宮本先生(中村母)

前回、戦艦大和が徳山湾に立ち寄った話をしましたが、ではなぜ寄港したのでしょうか。それは、大和に沖縄への海上特攻が命じられたことから、徳山の第三海軍燃料廠(しょう)で燃料をつぎ込むことなどのために、停泊したのでした。

ところで、大和にはよく「不沈艦」という言葉が使われていました。その理由は、甲板の装甲が非常に厚いことや、魚雷が当たる船体の側面部分は、細かく仕切った空間(部屋)が多く設置してあり、魚雷が命中してもその部分しか浸水しなく、またその魚雷が命中した反対側の部分に水を注水することで、船のバランスを保つことができる仕組みとなっていたことが挙げられます。

しかしアメリカ軍はそうした構造をよく研究しており、航空機による魚雷戦時には、雷撃する側面を決めて集中的に攻撃してきました。

それと、大和での金属の接合

文Ⅱ大津島巡航 三崎 英和

には電気溶接だけではなく、リベット接合も使われていました。そのため、魚雷の爆発力で、リベットが緩んだりにはじけ飛んだりすることで、そこから大量の海水が流れ込んでくることにより、反対側での注水が間に合わず、船は傾いていくことになり、最終的には船内の火薬庫が大爆発して沈んでしまいます。

現代でも軍用艦船は世界にたくさん存在しますが、それらの船に「不沈艦」という言葉が使われることはなくなりました。沈まない船はないことを、逆に大和は証明したことにもなるのでしょう。



イラスト 三崎さん

2023年9月号
No.293

大津島データ 140世帯
人口 191人 男 79人 女 112人
高齢化率 80.1%
(令和5年7月31日現在)

潮流

題字：末兼南子さん イラスト：大津美子さん



全部で13団体参加



恒例となった海岸清掃が7月15日に開催された。ボーイ、ガールスカウト、高校生、大学生や社会人などいろいろな方々に関わっていただいている。例年、雨かピーカンどちらかだが、開会式で「絶好の掃除日和・・・」といった途端、にわか雨に降られた。若潮の会は16名が参加。いつもありがとうございます。開会式後に三ツ石海岸に向



かう。例年この場所だ。今回は人工ゴミのみを拾う。缶、ペットボトル、発泡スチロール類。カキパイプも相変わらず多い。加えて使い捨てのライターが出るわ出るわ。水分補給と休憩と取りながら11時まで清掃をする。



その後、子ども達とともに稚魚放流へ。今回は3〜4cmに育ったカレイ。海水浴場の砂浜から放流するため道路から水辺までバケツリレーで運び、子ども達が「大きくなって帰ってきてね!」という掛け声とともに稚魚を海へ放つ。この光景だけはいつ見てもよい。

閉会式において、各団体が感想を述べるのが恒例となっている。若潮の会は開会式でお礼の挨拶をしたので免除。熱中症等による病人やけが人も出ずに無事に終了した。参加者が少しでも何かを感じてくれれば幸いだ。文Ⅱ佐々木 照彦

不慣れな畑づくりシリーズ ⑤



文＝内山 剛

今年も懲りずに地植え＋無農薬で野菜を育てております。写真は茄子や激辛野菜です。関係各所からの数々のご指摘の下、今年は雑草を適度に抜き、水をまめに与えたお陰で、それなりに収穫ができております。ハバネロ、キャロライナリーパー、シヨロキア etc。(唐辛子だよ)



来年は種類を増やしてみようかな！

刈尾待合所の仮設所

文＝大津島支所 中村 卓広

令和5年5月から令和6年3月にかけて、刈尾待合所の解体・建て替え工事を行っております。それにともない、令和5年7月14日から仮設待合所が利用可能です。トイレ・空調があり快適なので、船に乗り遅れませんか…。



令和5年7月14日から利用可



令和5年5月～解体・建て替え中

行事報告

文＝大津島支所 原田 和保

7月6日(木)、大津島ふれあいセンターにて人権教育課職員によるハートフル人権セミナーが開催されました。9名が出席され、ハンセン病問題について講話されました。

ハンセン病の歴史は長く、差別・偏見が現在でもなお続いている事、苦しまれている事を知り、考えさせられました。



お知らせ

【次回潮流発行予定日】
10月1日 第294号

移動図書館 やまびこ号ジュニア



9月16日(土)、10月25日(水)
馬島11:30～ 刈尾12:20～

大津島地区社会福祉協議会からのお願い
善意銀行への寄付にご協力ください

【9月～10月の主な島の行事予定】
9月15日(金) 敬老の日記念行事

【編集後記】

危険な暑さが続き、まだまだ台風シーズンは続きますが周南市で久しぶりに、神輿やお祭り等で大勢の人で盛り上がりを見せました。これからも続いてほしいと願っております。

文責：大津島支所 原田 和保

知っちゃんかな

盆を過ぎても、ふと気付くと

日が短くなっている。最終便が戻るとすぐに暗くなってしまふ。ほんのこの前までは最終便で帰っても、ひと仕事出来そうだったのに。日が短くなると、地獄の劫火で炙られるような暑さも少しは和らぎ、汗だくの日々からも解放される。涼しい風に両手を広げて深呼吸したくなる。それは子供の頃には分からなかった感覚だ。

子供の頃は、お盆も過ぎて、涼風が吹くと言ふことは、毎日出来ていた水泳が出来なくなる事であり、溜まりに溜まった宿題に向き合わなくてはならない時が来てしまったと認めなくてはならないからだ。日記もいつから書いてないだろう。その天気など今更分かつるはずもない。

それよりも難題は、読者感想文。まず、本さえも何を読むのかも決まっていない。それに思ってもいないことを書かねばならぬ読者感想文なんか、大嫌いだ。読者感想文ってどうして、あの変な決まりがあったのでしょうか。あの時代の事です。まず最初にあらすじを書く、次にそのこの辺りで、私はこう思いました。最後にわたしはこの本を読んで良かったと思います、で締める。



文＝松本 千恵子

流れも自分の考えでなく、決められたものを踏襲する。自堕落に生きていた、イヤイヤ今もって自堕落ですから、決まった中で自分が出せるような文など書ける筈もなく、辛い辛い宿題の一番だった。他に植物採取、押し花作り、手芸で縫い物で人形の服を作る人あり、貝殻を沢山集めて見事な標本を作る人。

そんなさまざまな作品を持って行く中で、夏休み帳、日記、その辺りの草をバタバタと集めた薄い植物採取、夜なべで縫った雑巾などが私の夏休みの宿題の全て。盆までの楽しい楽しい夏休みと、追い立てられた盆からの苦痛の夏休み。来年こそは宿題は早くやる、などという決意は九月いっぱい。翌年の夏休みはまだ同じサイクルを繰り返す私の子供時代。この歳になっても、夏休み終盤を迎えるたび、追い立てられるような、出来てないダメな自分を認めるような思いをしている私の夏休みの思い出。

ひろしのつぶやき

人の名も口に出ない、痴呆症の惚けたと心配する。時ならぬ時に、ひょっこりと思いつく。人間には忘れる強い力が有ると高名な学者が述べて居る情報の80%は忘れ去る。その流れに埋れて同時に忘れてはいけない事も忘れてしまつらしい。世を騒がせた忘れ去られた年金問題が発覚された時に送られて来た記録書。昭和20年来の就職した職場も大切な恩人も思い出せない。それでも、現在でも鮮やかに心に残る事柄がある。

私が小学6年生の夏、目の治療で小倉の叔父の家に世話に成った。大規模校6年1組に編入された2カ月間の悪夢は編入された組は進学希望の優秀な生徒。計算の速さ、読書きの早さ、確実さ、それよりも自意識の発露力。鮮やかな言葉で堂々と発表する。当時の私は先生の誘導する間に首を横に振るか縦に振るかの自己表示。学力の大きな差は歴然とし、その愚劣な私の姿は強力なイジメと感じ、忘れる事が出来ない。

優秀なる彼等は中学に進み大学へと知識を広め立派な社会人と成し事かと。秀才と云えば、サリン事件のオーム真理教の集団か。忘れると聞けば「私の記憶には有りません」の名言を思い出す。平和を願う秀才どもはロシアにもウクライナにも北朝鮮にも大勢居るはずだ。ミサイルを開発し隣国を脅かす此の事態をどうする家康とつぶやく・・・。



文＝屋野 廣志